全カリ Newsletter No. 41
2017.3.16
立教大学全学共通カリキュラム運営センター

専門性に立ち世界に通用する教養人の育成

―グローバル教養副専攻がスタート―

グローバル教養副専攻とは

グローバルかつ多面的に物事をとらえて持続的に考え続ける能力を養成し、国際社会に通用する応用力と発信力を身に付けるためのプログラムです。全学部学生を対象とし、学部学科や専修の専門性に加え、複数の分野にわたる知識を1つのテーマに沿って修得します。

具体的には学生自身が目指す海外体験（留学を含む）につながる指定された科目群を体系的に学び、大学が認定する海外体験を行い、その活動を報告することがグローバル教養副専攻を修了するための要件となっています。修了者には専用の修了証が発行されます。

コースとテーマ

2017年1月現在、グローバル教養副専攻には「Arts & Science Course」と「Language & Culture Course」の2つのコースがあり、それぞれに8つのテーマが設定されています。

Arts & Science Course は、全学共通科目の総合系科目である「多彩な学び」「スポーツ実習」を中心にテーマごとに基づいて履修するほか、言語系科目や海外体験を要件に従って組み入れ、専門分野の枠を超えた幅広い知識と教養、総合的な判断力を養うコースです。

Language & Culture Course は、全学共通科目の言語系科目を中心として海外体験とともに構成するコースです。専門性に加え、多面的に物事をとらえて持続的に考え続ける能力を養成できるように、多文化理解や外国語を使う力を身に付けます。言語 A（英語）を中心した3つのテーマと、言語 B（ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・朝鮮語）を中心とした5つのテーマがあります。

また、2018年度より学部や学内研究機関が提供する科目を中心に構成する「Discipline Course」の開設も予定しています。

3つの系列と海外体験

グローバル教養副専攻の各コース・テーマは、3つの系列と海外体験によって構成され、自分が目指す海外体験をイメージしながら、指定された科目を修得する必要があります。3つの系列の修了すべき単位、海外体験の認定基準はコース・テーマごとに異なります。

●第1系列 ＜日本発信科目＞	●第2系列＜基幹科目＞	●第3系列＜言語力科目＞	●海外体験
日本について学び、「自己理解」「伝達内容」「異文化との相互敬意」を養います。一部、外国語で行われる科目も対象になります。	Arts & Science Course…全学共通科目「多彩な学び」を中心とした科目の中からテーマに沿って履修し、各テーマの学びをより深めます。 Language & Culture Course…言語 A を中心としたテーマでは、プレゼンテーション、ディスカッション、ライティングなどの英語による学習スキルを養います。言語 B を中心としたテーマでは、「多彩な学び」のうち、当該言語圏に関係した講義科目の履修を通じて、その文化圏や多文化共生の理解を深めます。	Arts & Science Course…全学共通科目の言語系科目、外国語で行われる科目など、実地に異文化との接触を経験するために外国語での受信力および発信力を磨きます。 Language & Culture Course…言語 A を中心としたテーマでは、英語自由科目の修得を通じて、テーマごとの目的に沿った英語力を獲得します。言語 B を中心としたテーマでは、主に自由科目の修得を通じて、当該言語の知識と技能を獲得します。	海外で行われる大学の正課科目や派遣留学、自ら企画した海外ボランティアや私費留学のプログラムなどの海外体験を行い、帰国後に所定の活動報告を行うことで認定されます。単位修得は前提としていませんが、正課科目以外の海外体験の認定には事前申請が必要です。

目　次

グローバル教養副専攻がスタート……（1）
複言語主義の実現と自律的学習者育成に向けた課題の考察……林　英明（3）
全学共通科目における２つの企画提案型科目……（4）
「コラボレーション科目」実践例 ……上田　信（5）
「立教ゼミナール発展編」実践例 ……逸見　敏郎（6）
2016 年度全学共通カリキュラム運営センターの主な活動 ……（7）

グローバル教養副専攻のコース選択
（2年次春学期以降）

Arts & Science Course

テーマ

1：Global Humanity
2：Global Social Experience
3：Global Art Experience
4：Global Mind
5：Global Studies of Nature and Environment
6：Global Citizenship
7：Global Sports
8：Global Studies of Region

Language & Culture Course

テーマ

1：Academic Studies in English
2：World Issues in English
3：Communication in English
4：German Language & Culture
5：French Language & Culture
6：Spanish Language & Hispanic Culture
7：Chinese Language & Culture
8：Korean Language & Culture

第１系列（日本発信科目）の修了要件単位

第２系列（基幹科目）の修了要件単位

第３系列（言語力科目）の修了要件単位

＋　＋

大学が認定する海外体験（単位修得は条件としない）

グローバル教養副専攻修了（修了証発行は卒業時）

※各コース・テーマで必要な科目、修得単位数等の詳細はグローバル教養副専攻の公式 WEB サイトをご覧ください。

説明会

グローバル教養副専攻の概要、登録方法等の説明会を池袋・新座両キャンパスにて、下記の日程で開催します。

【日程】2017年6月26日（月）、6月29日（木）、6月30日（金）
【時間】17：15～18：15
【対象】2016年度以降に入学した学部学生で主に2年次生
※開催場所（教室）は決定次第グローバル教養副専攻公式 WEB サイト等でお知らせします。

コース登録方法

2016年度以降に学部1年次に入学したすべての学生が対象で、登録開始は2年次生の7月からとなります。
※登録開始日につきましては2017年3月現在未定のため、詳細はグローバル教養副専攻の公式 WEB サイトにてお知らせします。

グローバル教養副専攻公式 WEB サイト
http://s.rikkyo.ac.jp/rmp

グローバル教養副専攻ワークショップの開催

1月16日（月）に本学池袋キャンパスにおいて、Arts & Science Course のテーマのうち、Global Citizenship より「雪掘りとフィリピンに学ぶシティズンシップ」をテーマにワークショップ（サロン形式）が開催されました。今回は講師として、逸見敏郎学校社会教育講座教授、高野孝子客員教授より立教サービスラーニング科目について話題提供があり、実際に科目を履修した3名の学生が、それぞれのフィールド（南魚沼、埼玉、フィリピン）で体験したことを語りました。その後、中島俊克グローバル教養副専攻構想運営サブチームリーダーがファシリテーターを務め、参加者とともに意見交換を行い、海外体験をはじめ幅広い視野に基づく異文化体験、グローバル体験について語り合う機会となりました。

複言語主義の実現と自律的学習者育成に向けた課題の考察

教務部全学共通カリキュラム事務室　林　英明

1．全カリ公開 FD セミナーから得た知見

11月25日（金）に「グローバル化と複言語主義―立教大学における意義と展望―」というテーマで、全カリ公開FDセミナーが開催された。基調講演者として、立教大学名誉教授の鳥飼玖美子先生と早稲田大学政治経済学術院教授の室井禎之先生に登壇いただき、複言語主義に関する理念と日本の高等教育における位置づけなどについてご教示いただいた。

本学では、全カリ発足前の一般教育部の時代から全学で2言語を必修科目とするカリキュラムを維持してきている。今年度より、「言語教育構想プロジェクト」が発足し、将来の言語教育に在りかたについて議論を重ねている。全カリ公開 FD セミナーは、あらためて2言語を必修科目にしてきたことの意義についてヨーロッパで提唱されている複言語主義から学び、本学における新しい言語教育の在り方を検討するための知見とすることを、開催の目的の一つとしている。

2．複言語主義の理念

鳥飼先生によると、複言語主義（plurilingualism）とは、「自分の母語以外に少なくとも二つの言語を学習することによって、言語同士が相互の関係をつくり、新しいコミュニケーション能力をつくっていく、という言語教育観」であり、「母語以外の言語を二つ学ぶことによって、自分とは異なる世界や世界観を知り、そこから相互理解が始まるということを目指している」とのことである。複言語主義には、ヨーロッパにおける戦争の歴史を教訓にしつつ、「平和を守る」という高い理想が中心に置かれていることを学んだ。

また、近年国内で育成が推進されている「グローバル人材」という言葉には、経済社会が活性化するために必要な企業戦士が想定されているとし、この文脈で用いられる「グローバル化」は、「単一の尺度で物事を進めようとする動きであり、英語はその中で共通語としての役割を果たしている」。一方で国連やユネスコは「グローバル市民性」（global citizenship）を提唱しており、ここで用いられる「グローバル」は「多様性に満ちた地球社会（の市民）」という意味で用いられ、「グローバル人材」とは発想が全く異なる。他者への理解と寛容を目指す複言語主義の理念も、この「グローバル市民性」に合致している。

さらに、複言語主義のもう一つの理念として、「言語学習は学校教育の場だけでは終わらない」「言語は生涯にわたって学び続けるもの」という信条があり、言語教育にとって「自律性の涵養」が非常に重要であるとのことであった。

3．本学における言語教育の位置づけと自律的学習者の育成状況に関する考察

本学では、全カリを中心として教養教育（リベラル・アーツ）を重視してきた。その中でも本学の言語教育は、学問研究やコミュニケーションの手段としてだけではなく、言語が異なることによって生じる思想や発想の違いを自覚し、自国の文化を省みる姿勢の涵養も期待されている（全学共通カリキュラム検討委員会 1992）。教養教育の目的のひとつが、「異質な文化や他者への理解」（日本学術会議 2010）とするならば、2言語を必修科目とする本学における言語教育は、教養教育の中核を担っていると言っても過言ではないだろう。また、複言語主義の理念とも軌を一にするものである。

複言語主義のもう一つの理念である自律的学習者の育成の状況はどうであろうか。これは、学内で実施されている授業評価アンケートの結果を用いて考察したい。

表：2014年度秋学期全カリ言語教育科目授業評価アンケート集計結果　　度数（%）

	授業満足度			合計	継続学習の意欲			合計
	否定	中間	肯定		否定	中間	肯定	
英　　語	125(6.0%)	473(22.8%)	1,474(71.1%)	2,072(100.0%)	207(10.0%)	564(27.2%)	1,301(62.8%)	2,072(100.0%)
ドイツ語	9(2.2%)	57(13.9%)	344(83.9%)	410(100.0%)	53(12.9%)	116(28.3%)	241(58.8%)	410(100.0%)
フランス語	27(5.6%)	90(18.7%)	364(75.7%)	481(100.0%)	80(16.6%)	137(28.5%)	264(54.9%)	481(100.0%)
スペイン語	29(6.4%)	112(24.7%)	313(68.9%)	454(100.0%)	117(25.8%)	156(34.4%)	181(39.9%)	454(100.0%)
中　国　語	13(2.8%)	60(12.9%)	392(84.3%)	465(100.0%)	46(9.9%)	126(27.1%)	293(63.0%)	465(100.0%)
朝　鮮　語	6(3.7%)	27(16.6%)	130(79.8%)	163(100.0%)	24(14.7%)	30(18.4%)	109(66.9%)	163(100.0%)
合　　計	209(5.2%)	819(20.2%)	3,017(74.6%)	4,045(100.0%)	527(13.0%)	1,129(27.9%)	2,389(59.1%)	4,045(100.0%)

上記のアンケート集計結果は、言語必修科目を履修している1年次生を対象に実施している。設問項目のうち、「この授業を受けて満足している（授業満足度）」と「その言語の学習を継続していきたいと思うようになった（継続学習の意欲）」の回答結果を言語ごとに集計した（ロシア語は除く）。なお、アンケートの回答形式は「5. そう思う 4. ややそう思う 3. どちらでもない 2. あまりそう思わない 1. そう思わない」の5件法による選択肢となっているが、「5」,「4」を「肯定」、「3」を「中間」、「1」,「2」を「否定」の3つの回答形式に変換している。

集計結果を見ると、授業満足度については、全体で70％以上が肯定的回答をしている。英語と言語Ｂの比較では、スペイン語を除く4言語が英語を上回る満足度であることが分かる。一方で、継続学習の意欲は、肯定的回答が全体で60％に満たない。英語と言語Ｂの比較では、肯定的回答が英語を上回る意欲のある言語は、中国語と朝鮮語のみであった。

この結果から、本学の言語教育への満足度は高いと言えるが、継続学習への意欲には必ずしも結びついていない状況が分かる。自律的学習者を育てるためには、1年次の言語必修科目だけではなく、2年次以降も言語自由科目や学部専門科目との連携により、言語の継続的な学習を促すためのカリキュラム設計や指導法の開発が課題となるであろう。

4．おわりに

全カリ公開 FD セミナーで得られた知見から、本学の言語教育が2言語を必修とするカリキュラムを維持してきたことについて、複言語主義の観点からも重要であることが確認できた。一方で、複言語主義の理念である自律的学習者の育成に関しては、課題があることも分かった。鳥飼先生の講演では、自律的学習者を育成するための指導法として、「内容と言語の統合」や「協同学習」といった示唆も得られた。こうした知見を活用しながら、「言語教育構想プロジェクト」や全カリにおいて、言語教育のさらなる充実に向けた検討を進めていきたい。

【引用・参考文献】
斎藤兆史 鳥飼久美子 大津由紀雄 江利川春雄 野村昌司 2016『「グローバル人材育成」の英語教育を問う』ひつじ書房 pp.39-61
日本学術会議 2010「日本の展望―学術からの提言2010」p.17
全学共通カリキュラム検討委員会 1992「21世紀をめざす立教大学の全学カリキュラムについて（答申）」p.14

【全学共通科目における2つの企画提案型科目】

企画提案型科目は、全学共通科目の総合系科目において、教員が研究内容等に応じて自発的に企画・提案できる科目です。講義形式の「コラボレーション科目」、演習形式の「立教ゼミナール発展編」の2種類の枠組みがあります。

「コラボレーション科目」

異なる価値観を有する複数の担当者がひとつのテーマを巡って討論し、物事に多面性、多様性があることを知り、議論がせめぎ合う場を学生に垣間見させます。複数の担当者によって構成され（コラボレーション）、学際的、複合的な科目とし、時代に即応した問題やテーマを積極的に採用しています。アカデミックな内容に加え、時事性の高い科目も歓迎しています。

「立教ゼミナール発展編」

専門知識を一定程度身につけた学生（主に3～4年次生向け）が主体的に授業にかかわり、全学共通科目の総合系科目の伝統を受け継いだ高度で学際的な議論（いわゆる超学際的）ができるゼミ形式の科目です。先端的テーマを扱い、学生が新たな知的欲求を満たす場となり、異学部異学年混在の他流試合、専門性を客観視できる機会の提供を目指します。

～企画提案型科目の変遷～

「コラボレーション科目」は、時代に即応したテーマで、学生間・学生教員間・教員間の双方向、多方向のコミュニケーションを図る学際的・複合的な科目として、1997年に「総合B」科目の名称で始まり、学部、事務部局、学内諸研究機関等の協力を得ながら、コーディネーター教員による多彩な内容を展開してきました。その後、カリキュラム改編とともに、2012年度に「主題別B」、2016年度には「コラボレーション科目」と名称を変えながら深化しています。

「立教ゼミナール発展編」は、2006年度より「調べる」「読む」「考える」「発表する」能力を養うことを目的とした「立教生の学び方」を起点とします。その後、2012年度に「立教B（立教ゼミナール）」、2016年度には「立教ゼミナール」が展開され、RIKKYO Learning Styleにおける完成期（主に3～4年次生向け）の枠組みの中で、高度な学際性を有する科目として、新たに「立教ゼミナール発展編」が設置されました。

企画提案型科目の説明会（2018年度開講）

例年5月中旬に、科目の枠組みや開講手続き等の説明会を行っています。詳細が決まり次第、全学共通科目公式WEBサイト、学内掲示板等でお知らせします。

●コラボレーション科目

提案部局	科目名	コーディネーター
文学部	キリスト教と民衆文化	阿部善彦
	キャンパスデザインの思想と立教スピリット	阿部善彦
異文化コミュニケーション学部	音楽の生まれる場	星野宏美
	武力紛争を生きる人びと	石井正子
	翻訳・通訳と現代社会	武田珂代子
社会学部	グローバルシティ・ソウルを読み解く	黄盛彬
観光学部	睡眠文化論	豊田由貴夫
コミュニティ福祉学部	震災復興とコミュニティの再編	河東仁
全学共通カリキュラム運営センター総合構想・運営チーム	新しい時代を生き抜く力	郭洋春
	2020年東京パラリンピック支援を考える	松尾哲矢
	オリンピックマーケティング	沼澤秀雄
アジア地域研究所	少女歌劇の100年	細井尚子
ボランティアセンター	ボランティア論	平野方紹
ジェンダーフォーラム	いのちと暮らしのジェンダー論	和田悠
立教セカンドステージ大学	ヒトといきものたち	上田信
しょうがい学生支援室	しょうがい者の視点からみる現代社会	飯村史恵

●立教ゼミナール発展編

提案部局	テーマ	科目担当者
	聖地、祝祭、文化遺産から読み解くキリスト教の多面性	袴田渉
	Environmental Ethics and Virtue	佐良土茂樹
	戦争・メディア・大衆文化	松岡昌和
	見せるという病－足もとの展示を読み解く－	川口幸也
	Scito te ipsum：哲学思想から読み解く自己・他者理解の問題と多文化共生の可能性	松澤裕樹
	農業体験を通して食と農と協同組合を考える	郭洋春
	論理力徹底養成講座	出口汪
	囲碁で養う「考える力」	河野貴至
	野外体験を通じて学ぶ生物の多様性と自然との共生。／夏の奥秩父での自然観察＆フィールドワーク4日間	多田多恵子
	グローバル都市空間における多文化化の現実と課題	金兌恩
	人の移動と人文学	舛谷鋭
	東京パラリンピック支援の方法と実践	松尾哲矢
	イノベーション・マネジメントってなんだろう？	品川啓介
諸言語教育研究室	韓国・朝鮮研究へのアドバンスト・アプローチ	石坂浩一
中国語教育研究室	日本・台湾・中国をとりまく諸問題	門間理良
共生社会研究センター	市民活動の記録を読む	平野泉
立教サービスラーニングセンター	RSL －社会基盤としての文化論	藤井満里子
	埼玉の地域性とグローカリティを考える	今井信治

2016年度「コラボレーション科目」授業実践例

「持続可能な地域社会を考える」

文学部教授　上田　信

日本創成会議が鳴らした警鐘は、個々の地方自治体ごとに2040年の人口減少の推計値を明記したことで、日本全体を揺るがせた。人口半減を宣言された市町村だけではなく、政府も地方創成に動き、研究機関・NPO・大学も一斉に受容課題として取り上げるに至っている。本学でもESD研究所が、地域創生拠点形成のプロジェクトを進めている。本科目はこうした動向を受けて開講された。地域社会の問題は、世代をまたがる課題であるところから、立教大学セカンドステージ大学（RSSC）を提案部局としている。履修者は247名、そのうちRSSC受講者は47名、学部学生の多くが1年生であった。

授業はアメリカ環境文学を研究している野田研一氏と私とが主催し、現場での経験豊かな方々をゲストスピーカーとして迎えて進めた。扱われた話題である「観光」の原義は「国の光を観る」（出典『易経』）ことであり、それぞれの土地で輝いているものを発見することという深淵な問題提起から、ないものを挙げるのではない「あるもの探し」、葉っぱビジネス（お年寄りが山野で集めた料理のツマとなる葉や花を、ITを活用して企業化した上勝町の事例）、地産地消から「地消地産」（地域の持つ需要を掘り起こして生産すること）へ、といった具体例まで、多岐にわたった。定点観察のフィールドとして、静岡県西伊豆町を取り上げ、役場職員・コンサルタント・学生ボランティアのそれぞれの角度から、地域創生の可能性について語ってもらったことも、1つの特色となった。

学生の目の輝きが変わったのは、国際ボランティア学生協会IVUSAの職員から、学生が主体的に取り組んでいる地域創生活動の紹介があった授業からである。これまで授業とは受け身で聴くものだという姿勢から、自分自身もやろうと思えばやれるのだ、という意識を持つようになったのである。1月19日に行った最終回は、座学を拒否して14号館地下のフロア教室に場を移し、200名を超える人数でのワークショップに挑戦した（写真）。20ほどのグループに分かれ、授業を振り返った後、各自が地域創生に対して「やりたいこと」「やれること」「やらなければならないこと」を語り合ってもらった。それぞれのグループには、RSSCの受講生も含まれており、世代間の議論となったところも少なくなかったようである。

履修した学生のリアクションペーパーから

「これからは、持続可能な社会を創るための＜知識＞と、それを活かす＜縦と横のつながり＞が求められる。」

「授業を通じて、外国人である私が最初に感じたのは、こうした日本社会の諸問題は、自分の国の問題でもあるということでした。」（留学生）

「祖母の家は過疎地域にあります。今まで特に祖母の町について何も考えてきませんでした。しかし、今回の授業を通じて、無関心がもっとも悪いことなのだなと思いました。」

最終回に行ったワークショップには200名超が参加

講義概要（シラバス抜粋）

■授業の目標	少子高齢化が進む日本では、地域の存続が危ぶまれている。このような危機をどのようにして乗り越え、持続可能な地域社会を構想することが出来るのか、多角的な視点、世代を越えた対話のなかから見いだしていく。	
■授業の内容	日本の豊かな自然や文化は、地域のなかで育まれてきた。地域社会が消えることは、こうした宝が失われることである。本授業では先進的な事例を、多彩なゲスト・スピーカーを交えて学ぶとともに、いままさに動き始めた地域と連携を図りながらフィールドワークやグループ討論などを踏まえながら考えていきたい。履修者それぞれの今後の生き方をも、深く問うことになろう。	
■授業計画	1. 地域社会の現在	■授業時間外の学習 参考文献リストに挙げられている書籍などを読み、考察する。 毎回の授業やワークショップにおいて、主体的な発言ができるように、日頃から情報を集め、身の回りから出来ることを考えてくること。
	2. まちづくり1	
	3. まちづくり2	
	4. まちづくり3	
	5. まちづくり4	
	6. フィールド西伊豆町について	
	7.「わかもの」の役割1	
	8.「わかもの」2	■成績評価方法・基準 平常点100% ＜リアクションペーパー（出欠確認、内容も評価対象）(60%)、授業時の発言(10%)、最終回のワークショップへの参画度(30%)＞
	9. 学びを通した地域づくりの試み	
	10. 農業と地域	
	11. 林業と地域	
	12. 観光と地域	
	13. ESD（持続可能な発展のための教育）による地域創生	
	14. ワークショップ	

2016年度「立教ゼミナール発展編」授業実践例

「RSL －コミュニティリーダー論」

文学部／学校社会教育講座教授　逸見　敏郎

1．はじめに

2016年4月、立教サービスラーニング（RSL）センターが創設され、全学共通科目のもとRSL科目群が講義系・実践系・演習系と三つの柱で整備されることになった。本稿では、はじめての演習系科目である「立教ゼミナール発展編2～RSL －コミュニティリーダー論～」の全体像を振り返ってみたい。

2．授業目的と概要

RSL科目は、学生は学内での事前・事後学習とともに社会的課題の解決に取り組む学外機関の活動に一定期間参画する体験的学習が必須となる。これらの学習をとおして、社会的課題に気づき、その解決にむけて主体的に取り組みながら社会を作り上げるシティズンシップ（市民性）を習得することを目標としている。

「RSL －コミュニティリーダー論」では、筆者の専門である臨床心理学をベースにしながら、コミュニティのなかで活動する理論とともに基礎的な態度と技能の習得を目的とした。まずリーダーシップ像として、リーダーシップ論をレビューしたのちに、サーバントリーダー（Greenleaf,1977）やしんがり（鷲田,2015）と称される対話と協調を基盤におきながら決断するリーダー像を提示した。これらは多様な利害や価値観の交錯するコミュニティにおいて、その成員の能力を発揮しながら、コミュニティの合意形成と内発的動機に基づく行動を促進するために重要な示唆を内包しているからである。

次に、対話の方法としてnarrative based approach、物語的理解を取り上げた。これはコミュニティの成員のニーズをきくとき、単なるエピソードや語りとしてきくだけでなく、その個人の先行経験などを内包した物語としてきき取り、個人やコミュニティを了解するための方法論である。後述のゲストスピーカーの講義を聞く際に、この方法を活用する試みを学生には課した。

ゲストスピーカーとして、地域住民として地域の課題への取り組み、行政の立場から地域の課題への取り組み、そして国際的課題への取り組みとそれぞれ活動している次の5名にご登壇いただいた；根岸えま氏（一般社団法人オフィスまる、社会学科OG）、栗林知絵子氏（NPO法人豊島WAKUWAKUネットワーク代表）、山内道雄氏（島根県隠岐郡海士町長）、佐々木喜之氏（岩手県住田町社会教育主事）、木山啓子氏（NPO法人JEN代表理事、法学科OG）。

3．授業を終えて

受講学生は1年生から4年生の11名であった。このうちRSL科目を受講した経験のある学生は2名（1年生と3年生）、他は、サービスラーニングに初めて触れる学生であり、所属学部は、文・法・社・異文化・コミ福・観光であった。この多様性が全学共通科目の醍醐味ではあるが、学習や体験基盤の差を埋めることは容易ではなかった。

学生の反応は概ねよく、特に地域の資源を見直し活動している方々の話が自分自身のキャリアを考える刺激になったことがうかがえる。

今後はRSL科目のキャップストーンとしてのみならず、RSL科目へ誘う入り口としても機能させる方法を考えていきたい。

【ゲストスピーカー講義風景】
2016年12月2日・佐々木喜之氏（岩手県住田町社会教育主事）

講義概要（シラバス抜粋）

■授業の目標	私たちは、公私の生活ともに、制度及びルールのなか、他者と関係を切り結びながら生きていかなくてはならない。この授業では、コミュニティのなかで、制度や行政サービスを視野にいれつつ、市民が協働しながら自分たちのより良い生活を創り出す方法について、理論的および実践的に学修する。	
■授業の内容	この授業では、地域だけなく、サークル、ボランティア先など自分が関わったり、関心をもつコミュニティの魅力や課題に気づく、自分がそのコミュニティに関わる意味および意図を明確にする、メンバーの参加を促し、参加意欲を促進する、という諸点について、それぞれ理論と実際について講義とワークを取り入れながら進める。	
■授業計画	1. オリエンテーション	■授業時間外の学習 集団のなかでの自分の行動について、など受講前に振り返ってみてください。 また、毎時の予習としては、前時の内容を振り返り、確認しておくこと。それをもとに主体的積極的に発言すること。
	2. 自分を物語ること①：narrativeとしての自己・他者・narrativeと自己理解、ジョハリの窓	
	3. 自分を物語ること②：narrativeとしての自己・他者・物語ること、他者理解	
	4. 自分を物語ること③：narrativeとしての自己・他者・間主観的物語	
	5. コミュニティとは①：歴史的検討・市民／社会契約／国家	
	6. コミュニティとは②：コミュニティとは・身近なコミュニティの魅力、課題と自分	
	7. コミュニティとは③：関わりの方法・物語りを「きく」(listen、hear、ask)	
	8. コミュニティとは④：関わりの方法・物語りを伝える　アサーティブな伝え方	■成績評価方法・基準 平常点100% ＜最終レポート(40%)、授業内での課題など提出物(40%) 毎時のリアクションペーパー(20%)＞
	9. コミュニティに関わる①：・各自の課題設定と計画	
	10. コミュニティに関わる②：・計画の検討と共有	
	11. コミュニティに関わる③：・活動の実際	
	12. コミュニティに関わる④：・活動の実際	
	13. 報告会・自分の計画と関わりを報告する	
	14. 報告会とまとめ・活動の共有と総括	

2016 年度　全学共通カリキュラム運営センターの主な活動

＊2017年２月現在。３月に開催されるものは予定です。

＜言語系科目構想・運営チーム＞

①英語教育研究室
- ４月２日（土）英語ｅラーニングオリエンテーション
  （池）８号館8501教室　９：30～10：30
- ４月２日（土）新任教員オリエンテーション
  （池）マキムホールＭ202教室　11：00～12：00
- ４月２日（土）春学期ＦＤセミナー
  （池）マキムホールＭ202教室　13：30～15：30
- ４月４日（月）ディスカッションクラスオリエンテーション
  （池）6号館6506教室　13：00～14：30
- 12月３日（土）秋学期ＦＤセミナー
  （池）11号館Ａ203教室　13：30～15：30
- 12月10日（土）第17回大柴杯スピーチコンテスト
  （池）８号館8303教室　14：00～16：00
- １月７日（土）～23日（月）
  英語必修科目カリキュラムアンケート実施
  実施数：約4,800枚
- 英語力伸長度測定テスト（TOEIC IP）実施
  １年次対象：春学期（プレイスメントテスト）４月１日（土）、秋学期　12月３日（土）
  ２～４年次対象：春学期　４月９日（土）、秋学期　12月10日（土）

②ドイツ語教育研究室
- ７月26日（火）春学期担当者連絡会
  （池）11号館Ａ101教室　16：30～18：00
- ２月22日（水）秋学期担当者連絡会
  （池）16号館第２会議室　16：30～18：00

③フランス語教育研究室
- ７月８日（金）春学期担当者連絡会
  （池）太刀川記念館会議室　17：00～18：30
- 12月17日（土）秋学期担当者連絡会
  （池）５号館5303教室　15：30～17：45

④スペイン語教育研究室
- ７月28日（木）春学期担当者連絡会
  （池）13号館会議室　18：00～20：30
- ２月２日（木）秋学期担当者連絡会
  （池）太刀川記念館第２会議室　18：00～20：30

⑤中国語教育研究室
- ７月９日（土）春学期担当者連絡会
  （池）16号館第１会議室　16：00～18：00
- 12月17日（土）秋学期担当者連絡会
  （池）マキムホール会議室　16：00～18：00

⑥諸言語教育研究室
- ７月26日（火）春学期担当者連絡会（朝鮮語）
  （池）ロイドホール第１会議室　17：00～19：30
- １月30日（月）秋学期担当者連絡会（朝鮮語）
  （池）太刀川記念館第２会議室　17：00～18：30

＜総合系科目構想・運営チーム＞

- ４月21日（木）スポーツ実習科目担当者連絡会
  （池）ポール・ラッシュ・アスレティックセンター４階　18：30～20：00　＊普通救命講習実施
- ７月22日（金）2016年度第２回総合系科目担当者連絡会
  （池）11号館Ａ203教室　17：30～19：30
- １月16日（月）グローバル教養副専攻 Arts & Science Course ワークショップ
  （池）本館1204教室　18：30～20：30
- ２月24日（金）2017年度第１回総合系科目担当者連絡会
  （池）８号館8202教室　17：30～19：30

＜新任教員対象オリエンテーション＞

- ４月８日（金）
  人事課主催オリエンテーション
  「全カリについて」：佐々木一也（全カリ部長）
- ３月31日（金）
  ランゲージセンター主催オリエンテーション（新任教育講師対象）　佐々木一也（全カリ部長）

＜授業評価アンケート関連＞

①言語系科目構想・運営チーム
【2016年度「授業評価アンケート」関連】
- 全学共通言語系科目「授業評価アンケート」実施（2016年度秋学期科目対象）
  １月７日（土）～23日（月）
  実施科目数：235科目

【「授業評価アンケート報告書」関連】
- 全カリ言語教育科目「授業評価アンケート2015年度報告書」作成（2016年12月発行）

②総合系科目構想・運営チーム
【2015年度「学生による授業評価アンケート」関連】
・2015年度「学生による授業評価アンケート」学部等総評の作成
【2016年度「学生による授業評価アンケート」関連】
・2016年度「学生による授業評価アンケート実施」
実施科目数：春学期173科目、秋学期154科目、計327科目

＜シンポジウム＞

テーマ：「しょうがい学生にとっての外国語学習―その意味、そして教育と支援へのアプローチ―」
日　時：2016年11月５日（土）14：00～16：00
池袋キャンパス　11号館Ａ301教室
プログラム：
◆基調講演
宮城 愛美氏 （筑波技術大学　障害者高等教育支援研究センター　障害者支援研究部（視覚障害系）講師）
◆事例報告
佐藤 邦彦 （スペイン語教育研究室主任／異文化コミュニケーション学部教授）
新野 守広 （全カリ言語チームリーダー／ドイツ語教育研究室主任／異文化コミュニケーション学部教授）
◆司会
石坂 浩一 （諸言語教育研究室主任／異文化コミュニケーション学部准教授）
＊本シンポジウム筆録は「大学教育研究フォーラム」第22号（2017年３月発行）に掲載

＜公開 FD セミナー＞

タイトル：「グローバル化と複言語主義～立教大学における意義と展望～」
日　時：2016年11月25日（金）18：30～20：30
池袋キャンパス　14号館Ｄ401教室
プログラム：
◆講師
鳥飼 玖美子 氏（立教大学名誉教授）
室井 禎之 氏（早稲田大学政治経済学部学術院教授）
◆司会
新野 守広（異文化コミュニケーション学部教授）
＊本セミナーの筆録は「大学教育研究フォーラム」第22号（2017年３月発行）に掲載

＜学外対応＞

・７月２日（土）・３（日）日本私立大学連盟 学長会議・シンポジウム提題「多様な私立大学とその教育の質保証」（佐々木一也全カリ部長）
・11月19日（土）目白大学 公開講座・講演「教養教育カリキュラムと主体的学び―学生の主体性を引き出す工夫―」（佐々木一也全カリ部長）
・１月13日（金）立命館大学　来学
・２月18日（土）國學院大學教育開発シンポジウム・提題「RIKKYO Learning Style における全学共通科目―カリキュラムの有機的統合への挑戦―」（佐々木 一也全カリ部長）
・２月21日（火）龍谷大学　来学
・３月７日（火）ベネッセｉ－キャリア　来学

＜学会・シンポジウム参加＞

・６月11日（土）・12日（日）
大学教育学会第38回大会参加
テーマ：「伸びる大学の教育力－成果を出せる大学にはどのような教育力が必要なのか－」
佐々木 一也（全カリ部長）
林 英明・小島 緑（全カリ事務室）
・12月3日（土）・4日（日）
大学教育学会2016年度課題研究集会参加
テーマ：「学生はいかに学んでいるのか」
佐々木 一也（全カリ部長）
丹羽 祥太郎（全カリ事務室）

全カリ刊行物のバックナンバーについて

全学共通カリキュラム運営センターで定期刊行している「ニュースレター」、「大学教育研究フォーラム」は、全学共通科目のウェブサイトで公開しています。
●詳しくは 立教大学 全学共通科目 検索
また、図書館が提供する学術リポジトリ（立教 Roots）からも、既刊の全文検索が可能です。
・立教 Roots：http://library.rikkyo.ac.jp/roots/

全カリニュースレター　No.41
発　行　2017. 3. 16
発行人　佐々木 一也
編集人　松山 伸一、後藤 雅知
発行所　立教大学　全学共通カリキュラム運営センター
印　刷　株式会社　白峰社